フロアからの質問と回答

「地域共生学研究機構シンポジウム」にご参加いただき、誠にありがとうございました。
当日は時間の関係上、会場での質疑応答の時間が十分に取れませんでしたが、登壇者より回答をいただきましたので以下に掲載いたします。

■藤田氏へのご質問

Q. 学生さんへのメッセージとして、いわゆる一般企業への就職という選択肢ではなかったことについて、当時、迷いや不安はありましたか？萩原さんへの信頼関係がすでにあったということでしょうか？

＜藤田氏からの回答＞

　周囲が就職活動を始めた頃、自分はこの時期をどのように過ごしていくのか、すこし悩んだ記憶があります。一社だけ会社説明会に参加しましたが、そこでいわゆる就職活動そのものに違和感を覚えたことをよく覚えています。それ以降は、大学4年生の最後まで自分がやりたいことを続け、その先に見えてきた道へ進もうと考え、アルバイトや課外活動を続けていました。
　結果として、いくつかの進路が見えたように思いますが、やりたいことを1番気持ちよく続けられる気がして萩原さんに話を持ちかけたと思います。
萩原さんと出会ったのは大学2年生の頃だったと思いますが、大学4年生の時点で、すでにしっかりとした信頼関係が築けていたわけではありません。どちらかというと、ぼくが勝手に萩原さんの活動に興味を持っていたという感じでしょうか。

Q. 地方創生について、私も「地域活性化」「地域おこし」や「過疎対策」のような言葉はつかいたくなくて、要は地方で暮らす自分たちが心地よい暮らしができれば、都市に暮らす人たちもそう思ってくれるかも？と考えています。移住者、若者の取り合い合戦みたいになるのはどうかな？と。そこで最近、総務省が提唱している「関係人口」を増やそうとしていることについて、何かご意見はおありでしょうか。

＜藤田氏からの回答＞

　活動を通じて、自分たちの暮らす地域を気にかけ、継続的に関わってくれる人が増えることは、よいことだと思います。また、自分たちの暮らす地域を気に入り、移住してきてくれることも嬉しく思います。ただ、いくつかの候補地があるなかで瀬戸内への移住を選ぶか、その後もずっとこの地域で暮らし続けるかは、その方自身が決めることだと思っています。
「わがまちを良くしたい」と言うときに、その「まち」を定められた行政区分だけで捉えることには、なんとなく抵抗があります。ぼくが活動する際に考えていることは、「丸亀市」や「香川県」という言葉は使わずに、「中讃（香川県の真ん中あたり）」、「香川・瀬戸内」という風に、すこし広がりを持たせた言葉を使うようにしています。
　移住者や若者を地域同士で取り合うのではなく、周辺の地域ともゆるやかに連携しながら、この地域を好きになり、関わってくれる人がすこしずつ増えていけばよいなと思っています。

Q. 取り扱う本はどんな分野ですか？本は売買ですか？

＜藤田氏からの回答＞

　シェアメンバーそれぞれが好きな本を並べているのでジャンルは決めていません。本棚に並べている本は全て販売しています。

Q. レンタルも可？ですか

＜藤田氏からの回答＞

　レンタルは行っていません。

Q. 利用される方はどんな方？こんな方に利用してほしいってありますか？

＜藤田氏からの回答＞

シェアメンバーは、この地域となんらかの関わりがある方が多いです。本が好きな方なら誰でも。このまちの住民とちょっと出会ってみたい方にも訪れてもらいたいです。

Q. この街にどんなネットワークがあると（どんなお店があると）きっとよくなると思っていますか？

＜藤田氏からの回答＞

様々な年代、背景をもつ方々が出入りしていて、風通しが良い店。

Q. とても楽しいお話でした、ありがとうございました。今後の藤田さんの新しい（今考えられている）企画があれば教えてください。宿でしょうか。

＜藤田氏からの回答＞

来春、2/28(日)にZINEのマルシェ「ZINE MART VOL.3 & RISO MEET」と、4月下旬に「これからの生活の道具」をテーマにしたクラフトフェアのようなイベントを企画しています。宿をやりたい気持ちはまだありますが、もうすこし先になりそうです。

Q. とても面白い講義でした。ありがとうございました。丸亀を訪ねたら、実際に藤田さんが淹れてくれるコーヒーが飲めるのでしょうか？

＜藤田氏からの回答＞

「城南書店街」では、営業中はいつでも、ぼくが焙煎したコーヒー豆を使って、シェアメンバーが淹れるコーヒーをお楽しみいただけます。ぼく自身が淹れるコーヒーを飲んでみたい方は、ぜひ「ふじたしょうてん」へお越しください！

Q. 藤田さんが宿泊された中で、１軒紹介していただきたいです！！

＜藤田氏からの回答＞

宿とまちのグループ感は、長野県諏訪にある「マスヤゲストハウス」が最高でした！

■パネリストへのご質問

Q. 本の様々な側面や可能性を講演を聞いて知りました。ありがとうございました。アナログ世代からすると、紙でない本ebookなどに非常に違和感を持ってしまうのですが、藤田氏、白岩教授はいかがですか？本屋さんが減ってきているのも淋しいです。

＜藤田氏からの回答＞

情報を伝えるために、電子書籍をはじめ、さまざまな形態が生まれていることは面白く感じています。持ち運びやすさや、すぐに読めることなど、電子書籍ならではのよさもあると思います。一方で、紙の香りや質感、物としての重みを感じられる紙の本が、ぼくは好きです。

＜白岩教授からの回答＞

私もやはり紙の本が好きです。本棚の背表紙を眺めたり、手に取って対面したり、偶然となりの本に出逢ったりー ー紙の本には、内容だけではない〈身体／物体〉がありますよね。本屋さんが減少していくことを淋しく感じるのも、本を買う場所だけでなく、生身同士で偶然に出逢える場所が減っていくからかもしれません。

私自身、ebookはほとんど使わず、電子媒体で読むのは論文のPDFくらいです。とはいえ、紙の本こそ「本物」で、電子書籍はそうではない、とも言い切れまないような……。本の面白いところは、どんな姿をしているか以上に、そこから何が始まるかにあるからです。

紙でも電子でも、ひとりで読んでいた言葉を誰かのところへ携え、また別の言葉が返ってくる。今回のお話でも申し上げたように、本の続きがページの中ではなく、人と人との〈あいだ〉にあるのだとすれば、入口はいくつあってもよいのだと思います。

ただ、本屋さんには残ってほしいですし、残していきたいですよね。本はひとりでも読めますが、本屋さんは、ひとりでいながら誰かと居られる、なかなか不思議な場所ですので！

Q. 本好きの人は本屋さんですが、より多くの人が集まるなら何屋さんだと思いますか。
（メモ：日常生活＝地域活動＝支え合い　これの＋αです。）

＜藤田氏からの回答＞

人が集まり、関わることのできる仕組みがあり、その店を開きたい人がいるのであれば、何屋さんでもよいと思います。本屋、コーヒー屋、八百屋、食堂など、それぞれの場所に集まる人や、関わるきっかけは異なります。さまざまな特色を持つ場所が地域のなかにあることが大切なのではないかと考えています。

＜白岩教授からの回答＞

「何屋さんかな～？」と考えて、いろいろ思い浮かびましたが、たぶん何屋さんでもいいのだと思います。

今回のお話を通して感じたのは、人を集める産業や業界そのものよりも、用事がなくても居られるか、ということでした。本屋さんでも、コーヒー屋さんでも、食堂でも、はらっぱでもいい。話してもいいし、黙っていてもいい。誰かと一緒でも、ひとりでもいい。

ご質問に添えてくださったメモ「日常生活＝地域活動＝支え合い ＋α」という発想が、とてもすてきだと思いました。「＋α」は、もしかすると「何かをしなくても、そこにいていい」という感覚なのかもしれません。人を集めようと頑張りすぎない場所にこそ、結果としてたくさんの人が集まってしまうー ーそんな「何屋さん」が街にいくつもあったら愉しいですね！

■事務局へのご質問

Q. 今回、白岩教授と矢吹教授がコラボすることになったいきさつは？

＜事務局からの回答＞

今回のシンポジウムは、矢吹教授が人と人とのつながりづくりに「本」と「コーヒー」が重要な役割を果たしていることを指摘されたことがはじまりでした。白岩教授は「本」を通じてさまざまな方と交流をされていたことから、お声かけしました。